

被災者に思い重ね



東日本大震災発生時刻の午後2時46分に合わせ、黙とうするフォーラムの参加者＝佐賀市のエコプラザ

「12年前の福岡西方沖地震、昨年4月の熊本地震。佐賀にも、佐賀平野北縁断層帯という活断層があります。ここ佐賀の地に起こらないという保証はどこにもありません。」
(森氏談)

「もし10万円の余裕のお金があったら、ぜひとも現地を訪ねてほしい！神様から贈り物をもらえます！」
(吉田氏談) 下段は吉田さんから参加者へメッセージ

震災時の被災地への配慮

- ①むやみやたらに電話、メールをいれない。本当に大切な連絡がつかなくなる。
- ②物資を送るのは3日から1週間。その後は100円でも50円でもいいから義援金を送り続けてほしい。必要なのはお金と人の力です。

3/12 佐賀新聞記事

次代へ教訓つなぐ

県内でフォーラム、上映会

東日本震災から6年となった11日、震災の教訓を次世代につなぐ、地域づつりに生かしていくこと、住民グループによるフォーラムや上映会などが佐賀県内でも開かれた。苦難を乗り越えようと支え合っている被災地の人たちに思いを重ね、共助の大切さを確認し合った。

「人とのつながりや地域の関係性が大切だと痛感する」。佐賀市のエコプラザであった大規模災害への備えを考えるフォーラム。家庭の不用品を販売した益金を被災地に届けたNPO法人さが環境推進センター（佐賀市）の甲本洋子さんは、役員を務めている佐賀市の自治会で、炊き出しや情報収集など災害時の役割

「12年前の福岡西方沖地震、昨年4月の熊本地震。佐賀にも、佐賀平野北縁断層帯という活断層があります。ここ佐賀の地に起こらないという保証はどこにもありません。」
(森氏談)

「もし10万円の余裕のお金があったら、ぜひとも現地を訪ねてほしい！神様から贈り物をもらえます！」
(吉田氏談) 下段は吉田さんから参加者へメッセージ

自治会で各団体、グループ活動の予定表を作り、携わる人を見える化するとともに、消防・防災の部門では自主防災組織を作り災害時の任務を班ごとに決めている。結果、地域でのつながりが強まってきている気がする（甲本氏談）

震災の備え

- ①3日分の水を確保しておく
- ②家族の集合場所を決めておく
- ③防災グッズはすぐに出せる場所に置いておく

イベント報告

キヲクをツナグ～東北・熊本・ジブンゴト～ 3月11日フォーラム“命をツナグ、人をツナグ”

昨年末初めて被災地を訪ねた折、5年たった被災地の状況に衝撃を受けた。「まだ終わってなどいない」という現実。そして、被災地と災害時に命をつなぐには、人と人とのつながりが不可欠であると実感し、このことを発信できたらと3月11日にフォーラムを企画した。今回、被災地とつながっている4人のパネラーとコーディネーターにご参加いただき、身近に被災地の現実を感じ、防災の備えや他人ごとではなく「ジブンゴト」としてとらえてもらう機会になった。また、日頃からの地域でのつながりやコミュニケーションの大切さを再確認できたフォーラムになった。参加者からは「現地に赴いた方の話に心が震えた」「もっと伝えていかなければ」「防災を改めて考える機会になった」「日常の絆を大切にしたい」「来年もやってほしい」などのお声をいただき、皆で共有し、つないでいくことの大切さをあらためて感じた。

エコプラザ 桑原

3/12 西日本新聞記事

東日本大震災
6年



東日本大震災から6年になる11日、被災地ボランティアが経験を語るフォーラム「命をツナグ、人をツナグ」

報告したのは武雄市武雄町の会社員吉田秀敏さん(63)▽佐賀市循環型社会推進課長の森清志さん(53)▽NPO法人さが環境推進センター副理事長の甲本洋子さん(70)▽小城高1年の泉るなさん(16)の4人。

吉田さんは6年前、「支援に行かなきゃ後悔する」とガソリンや支援物資を車に積み、発生から10日後には東北に向かって腐敗した魚類やがれきの撤去を手伝った。支援を続けるため岩手県に移り住み、陸前高田

市や大槌町で2年半を過ごしたという。「被災者は忘れられるのが一番つらい。思いを寄せ続けてほしい」と話した。東北を定期的に訪れているという森さんは「現地の人と食事したり酒を酌み交わしたりと、気軽にできることから始めればいい」と語った。

神埼市の主婦小野富紀子さん(52)は宮城県石巻市出身は「九州は心ある人が多くうれしかった。支援の輪が広がり、震災がみんなの記憶にとどまればと思う」と話した。(梅本邦明)

被災地支援考える

ボランティア経験者が講演

「が、佐賀市高木瀬町長瀬の市エコプラザで開かれた。東北地方の出身者を含め約50人が参加、支援のあり方を考えた。

報告したのは武雄市武雄町の会社員吉田秀敏さん(63)▽佐賀市循環型社会推進課長の森清志さん(53)▽NPO法人さが環境推進センター副理事長の甲本洋子さん(70)▽小城高1年の泉るなさん(16)の4人。

吉田さんは6年前、「支援に行かなきゃ後悔する」とガソリンや支援物資を車に積み、発生から10日後には東北に向かって腐敗した魚類やがれきの撤去を手伝った。支援を続けるため岩手県に移り住み、陸前高田